

## 杉浦重剛宛書簡

肥前国高来郡南串山村庄屋馬場家文書より

吉田 信也  
谷川 穰

本稿で翻刻・紹介するのは、肥前国高来郡南串山村（現長崎県雲仙市南串山町）で庄屋をつとめた馬場家の文書に含まれていた、杉浦重剛宛ての書簡五九通（以下、本書簡群）である。同文書は現在、雲仙市歴史資料館南串山展示館が所蔵している。

## 一 杉浦とその研究について

杉浦は周知の通り、明治から大正期にかけて活躍した思想家・教育家である。一八五五（安政二）年に近江膳所藩の儒者・杉浦重文の次男として生まれた杉浦は、維新後に貢進生として大学南校に入学し、一八七六（明治九）年にイギリス留学、化学を学んで帰国したのち一八八二年に東京大学予備門長を務めた。著書『鬼哭子』（一八八四年）で「理学宗」を提唱したように、自然

科学を儒教道徳に結びつけて解釈する独特の思考態度を基盤とした。一八八八年に文部省参事官兼専門学務局次長、九〇年に衆議院議員、辞職後は東京朝日新聞論説員などをつとめる一方で、井上馨や大隈重信に対する条約改正反対運動や、三宅雪嶺・志賀重昂らを同人とする政教社の結成、その評論雑誌『日本人』の創刊（ともに一八八八年）、日本中学校の校長就任（現日本学園中学・高校、一八九二年）、私塾・称好塾の主宰など、その国粹主義的な思想にもとづいた思想運動や教育活動に従事したことでも知られる。そして一九一四（大正三）年からは東宮御学問所御用掛となり皇太子裕仁親王（昭和天皇）の倫理学講師として、その思想形成に大きな影響を与えたと言われ、皇太子の婚姻に際して発生した「宮中某重大事件」にも重要な役割をはたした人物であ

る。

その著作や日記、発信書簡の類は『杉浦重剛全集』全六巻（思文閣出版、一九八三年、以下全集）に収録されている。もともと杉浦家・梅窓会（日本中学校の同窓会）、称好塾・滋賀県教育会などが所蔵していた史料群が、新聞・雑誌等に寄稿した杉浦の著作類とともに編纂された。それらは現在日本学術高校資料室で保存されている<sup>①</sup>。また全集未収録の発信書簡もあり、おもに国会図書館憲政資料室に所蔵・寄託されている。杉浦の弟子である古嶋一雄宛の八通を筆頭に、小橋元雄宛が五通、牧野伸顕宛四通、関屋貞三郎宛三通、以下小橋一太・小河一敏・石川安次郎・辻新次宛各二通、後藤新平・小川平吉・宗方小太郎・水野鍊太郎・安部井磐根・杉浦真鉄宛各一通、確認できる。他に立教大学図書館所蔵『谷干城関係文書』に谷宛一通、首都大学東京図書館情報センター所蔵『花房義質関係文書』に花房宛一通があり、『陸羯南全集』第一〇巻（みすず書房、一九六八年）に羯南宛の三通が掲載されている。時期としては、その大半が明治末から大正期のものである。しかし来簡については、「渡辺刀水旧蔵諸家書簡文庫」（東京都立中央図書館所蔵）の河上謹一からの二通、穂積陳重からの一通（早稲田大学図書館所蔵）、大町桂月・猪狩史山「杉浦重剛先生」に収録されている佐々木高行書簡などが見いだせるが、

まとまったものは従来明らかにされてこなかった。まずその点で、本書簡群は貴重なものと言える。

杉浦の顕彰的な伝記は前掲『杉浦重剛先生』をはじめ、戦前期から刊行されている<sup>④</sup>。だが学術的専論は、その思惟構造の特異性や保守的な思想傾向も手伝ってか、知名度の割には目立たない。それでも、教育学の方面では海後宗臣・皇紀夫・沖田行司らの思想研究<sup>⑤</sup>、企業人ネットワーク論の視点から杉浦の人間関係を概観した経済史の瀬岡誠<sup>⑥</sup>、杉浦の移民論と被差別部落認識を検討した天沼香<sup>⑦</sup>、近年では易学者高島嘉右衛門との思想的関係を論じた下村育代の論考などが列挙できる。なかでも最も重要な包括的検討を行ったのは、渡辺克夫の一連の研究であろう。渡辺は明治初年から明治三〇年代までの時期を対象に、英国留学時の軌跡や条約改正反対運動への関与など、思想面にとどまらない具体的な活動ぶりを明らかにし、全集刊行以前から杉浦執筆の新聞・雑誌論説を博搜・検討している<sup>⑧</sup>。こうした一定の研究蓄積はあるものの、主として焦点が当てられるのは杉浦の前半生であり、明治二〇年代後半から大正期の宮中での活動までの間は、考察が乏しい<sup>⑩</sup>。右のような研究状況の理由として、戦前の顕彰から反転して戦後にはあまり評価されなくなったという点はもちろん、史料面での問題も挙げられる。全集第五巻所収の杉浦書簡は、称好塾時代

の弟子である銀行員・島弘尾宛の一三六通を筆頭に、鶴田龜二宛五六通、高橋喜惣治、塩田弥惣八、実弟松本庄太郎ほか、四、五〇ほどの個人・団体へ宛てた計四八三点である。これらから島弘尾へ頻繁に金の工面を依頼する様子など、主に杉浦の私的な一面を垣間見ることができる。だが、終生の盟友である後の外相・小村寿太郎や、大学南校以来の友人・河上謹一へ宛てた書簡は一通もなく、本書簡群の発信者宛のものも、わずかに義父・千頭清臣への一通が見出せるだけである。杉浦の活動ぶりについて、書簡から人間関係や周囲の環境とともに考察を深めるよりも、もっぱら著作や語録、没後の回顧談、ごく短期間の日記等に依拠してきたという状況が、研究の偏りを招いていたと言えるかもしれない。実際、全集所収の書簡が研究論文で用いられた箇所は管見の限りごくわずかである。本書簡群はその点でも、杉浦研究の新たな展開を促す可能性を秘めている。

- ① 伊藤隆・季武嘉也編『近代代日人物史料情報辞典』吉川弘文館、二〇〇四年、二二七頁（中野目徹執筆）。
- ② そのほか、『福本家蔵福本日南関係文書目録』（広瀬玲子『国粹主義者の国際認識と国家構想』芙蓉書房出版、二〇〇四年）にも、年月日不詳のものが一点取められている。
- ③ 大町・猪狩「杉浦重剛先生」政教社、一九二四年、三二六・七頁間の口絵写真。同書には父杉浦重文の生前最後の手紙（三四〇・一頁

間）、京師大学堂総教習・呉汝輪からの來簡（三四八・九頁間）の写も収められている。

- ④ 猪狩又蔵（史山）『杉浦重剛先生小伝』日本中学校同窓会出版部、一九二九年、西村久吉『杉浦重剛先生の日本精神とその教育』江州公論社、一九三六年、猪狩史山・中野刀水編『杉浦重剛座談録』岩波書店、一九四一年、藤本尚則『国師杉浦重剛先生』敬愛会、一九五四年、渡辺二雄『明治の教育者杉浦重剛の生涯』毎日新聞社、二〇〇三年、など。最も新しい渡辺のものでも、全集所収の書簡は用いられていない。
- ⑤ 海後「西村茂樹・杉浦重剛」（北海道出版社、一九三七年。のち『海後宗臣著作集』第三卷、東京書籍、一九八一年に収録）、皇「杉浦重剛研究（Ⅰ）」（Ⅱ）」（『京都女子大学』教育学科紀要』二六〜二八、一九八六〜八八年）、沖田「近代教育と伝統主義——杉浦重剛——」（『新訂版日本近代教育の思想史研究』学術出版会、二〇〇七年）。
- ⑥ 瀬岡「江州系企業者と準拠集団（一）」（『滋賀大学経済学部附属史料館研究紀要』二一〜二三、一九八八〜八九年）。
- ⑦ 天沼「明治中期国粹主義者の移民観——政教社、杉浦重剛の移民論から——」（『東海・女子大学紀要』六、一九八七年。杉浦の移民・殖民論については広瀬前掲書、被差別部落認識に関しては久木幸男による『全集』一・二巻の解題や、久木に異を唱える石流豊美『樊噲夢物語』の構造と評価」（『部落解放史・ふくおか』九八、二〇〇〇年）も論じている。
- ⑧ 下村「杉浦重剛における伝統と近代科学——高島嘉右衛門の易に対する理解をめぐって——」（『橋社会科学』七、二〇〇九年）。
- ⑨ 渡辺「明治二〇年の条約改正反対運動——私学教育研究紀要』二八、一九八〇年）、「帝國議會と大成会——杉浦重剛の役割——」（『日本学園高等学校研究紀要』一、一九八一年）、「杉浦重剛の「国権論」

(一・二)〔同前二、一九八三年〕、「杉浦重剛の精神形成」・「明治後期のナシヨナリズム——杉浦重剛と東亜同文書院——」〔同前三、一九八六年〕、「杉浦重剛の英国留学(一)」〔同前四、一九八八年〕。

⑩ 伝記を除けば、渡辺前掲「明治後期のナシヨナリズム」が数少ない例外。なお「宮中某重大事件」への杉浦の関与については、渡辺が「宮中某重大事件の全貌」〔THIS IS 読売〕三七、一九九三年〕で日本学園所蔵『辛酉回測録』を用いて論じている。

⑪ 皇前掲「杉浦重剛研究(Ⅱ)」一一頁で二通(一八九一・二年のもの)、同(Ⅲ)四頁で一通(一八九〇年)。詳細な注記と全集参照がなされている瀬岡前掲「江州系企業者と準拠集団」でも、同(一)六一頁で一八七四年の一通が用いられるのみである。

## 二 伝来の経緯

ここで、本書簡群の発見と伝来について述べる。馬場家最後の当主・園子氏の没後、廃屋となった居宅が当時の南串山町に寄贈された。その後南串山史談会が家屋内を調査したところ、古文書や書画が分類的形跡もなく混在した状態で発見された。同会は近世期の史料については数量を概ね把握したが、全容を示す目録作成には至っていない。筆者の吉田は二〇一〇年一月、その目録化のため再調査を開始し、その際一塊の書簡群の中から馬場家の私信に混じった本書簡群を発見した。入手経緯・動機は不詳だが、園子氏の父で前当主の馬場一郎が収集したものと推測される。

園子氏が残した履歴書によると、一郎は一八七〇年三月五日(明治三年二月四日)生まれ、長崎医学学校中退、上京の後仙台の第二高等学校を卒業して中学校教員となる。そのかたわら東京帝國大学法科大学に合格し、卒業は一九〇九年七月、すでに満三九歳であった。卒業後すぐに朝鮮総督府の官僚として公州に着任した。以後、京城博物館に勤務、おもに朝鮮古蹟調査に事務方として従事し<sup>①</sup>、小川敬吉編の調査報告書『梁山夫婦塚と其遺物』(朝鮮総督府、一九二七年)の刊行にも一役買っている。その後は郡守として咸興・慶州などを渡り歩くが、一九二八(昭和三)年一月、咸鏡北道・清津府庁在職中に庁舎の火災で「御真影」が焼失し、その責任をとって翌年退職する。そして「朝鮮における伊藤博文公」と題して本を出すことがきまり、いろいろ資料をあつめていたが一頁もしるすことが出来ず<sup>②</sup>に一九三〇年に六一歳の生涯を閉じたという。本書簡群の年代が明治中・後期に集中している(後述)ことと、昭和戦前期に記されたと思われる馬場家の「書画目録」(写真1)が発信者名を列挙していることから、一郎の没する前後には馬場家に本書簡群が存在していたとみられる。それらを収集する関心を抱き、発信者のフルネームを比定できる(誤りもあるが)知識を有する人物が、当時の馬場家では一郎以外にいたとは考えにくい。よって、是一郎の収集したも

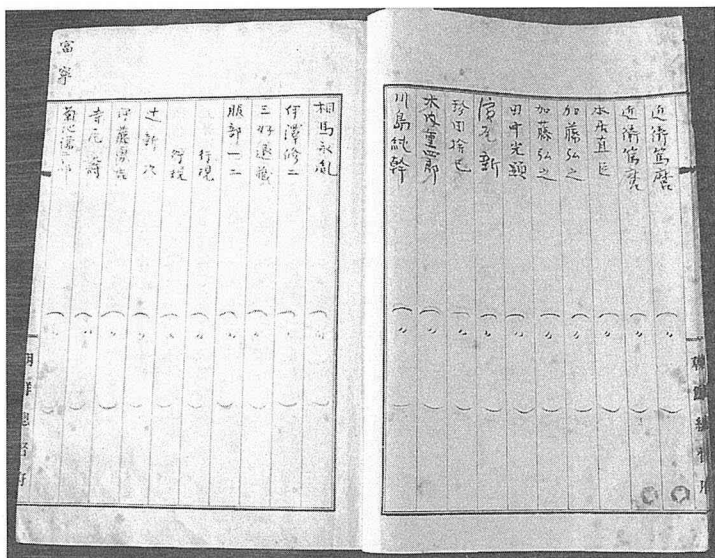


写真1 「書画目録」

のと解してよいだろう。それを是一郎の妻・かめ子が、彼の没後に南串山村へ持ち帰ったものと思われる。

この目録には書簡以外に書軸や絵画も百点以上にわたって記されているが、現物の多くは管見の限り見あたらない。杉浦宛書簡でも目録にある近衛篤磨ほか数通が発見できず、これらは紛失ないし売却された可能性も高い。また、是一郎の収集と思われる書簡は他に二七点確認された。主に、寺内暢三や杉孫七郎といった長州藩士や、豊田彦次郎（天功）や会沢安、小宮山次郎衛門（楓軒）といった水戸藩士の書簡である。とくに後者は青山量太郎（延光）宛のものが多い。この点から、是一郎を書画類も含めたコレクターとして見ることもできるかもしれない。さらに是一郎の朝鮮在勤時代の数年分の手帳、および自筆書類が若干残っており、古蹟調査に携わった植民地事務官僚の動向をうかがう一素材として価値を有すると思われる。

なお、是一郎と杉浦との接点は現段階では確認できていない。是一郎の在京時代、杉浦はずっと病床にあった。ただし「書画目録」には是一郎宛沢柳政太郎書簡の存在が記されていること、是一郎の二高時代の校長が沢柳であったこと③などから、間接的な縁は見いだせる。

① 履歴書には「大正二、京城総督府博物館に転任」と記されているが、

総督府博物館の設立は一九一五（大正四）年のことであり、誤記と思われる。なお、「朝鮮ニ於ケル博物館事業ト古蹟調査事業史」（朝鮮総督府、一九三〇年）には、一九一五年一月に奏任官待遇の博物館庶務主任を委嘱され、一九二二年三月まで従事した旨の記載がある（六九一七〇丁。国立中央博物館編『冠子 박물관 100년사 韓国博物館百年史』二〇〇九年、所収）。この史料については、吉井秀夫氏のご教示を賜った。記してお礼申し上げます。

② 『京城日報』一九二八年二月四日付夕刊に、四日午前一時一分に火災発生、財務係を残して庁舎が全部焼失した旨の記事がみえる。

③ 沢柳の校長在任期間は一九〇七年四月〜一九〇八年七月。是一郎の手帳にも沢柳の住所の記載がある。なお宛先不明の沢柳書簡が馬場家文書に含まれていたため、参考までに翻刻を示しておく。

〔前欠〕 京都大学現行之規則ハ三年にても卒業シ得ルコトニ御座候。規則御一覽可然候。京都大学教授ハ何人ト云フコト確定セス、目下数多留学中ノ新進ノ士望也。不取敢右迄、草々

九日 沢柳 〔後欠〕

### 三 本書簡群の内容

時期的には、一八八〇年代後半から一九〇二年、つまり明治二〇年代から三五年（同年七月、杉浦は病に倒れ八年間療養生活を送る）のものがほとんどと推定される。紙幅の関係上、内容の詳述はしないが、①学校・塾・官職に関する人物紹介・照会（2、4―1・2、6―3、7―2、9など）、②教育組織・団体および中学関係（6―2、17、27など）、③父親の逝去（10、37、40

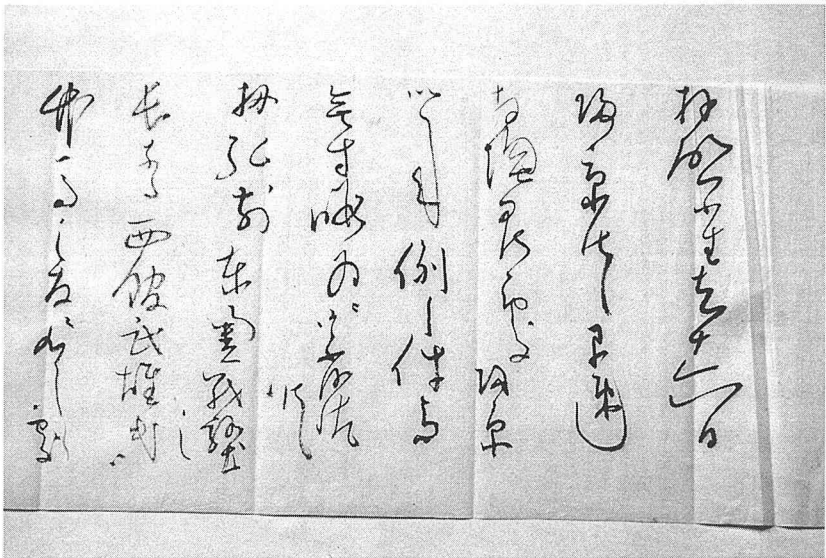


写真2 陸羯南書簡

など、④対外硬派の活動（1、19―2・3など）、⑤東亜同文書院長としての渡清および東アジアの教育事業（3、7、14、16など）、⑥その他、といった大別が可能である。①では面会の要望や日本中学校・称好塾への入学斡旋、そして地方官や公立中学校教員の転勤の口添えなど、杉浦の教育界・官界への人脈のほどがうかがえる。陸羯南から届いた18（写真2）は弘前・東奥義塾からの塾生転校について述べられているが、雑誌『二十六世紀』の筆禍事件に関する記述もある。②では一八八三年に結成された教育関係者の全国的団体・大日本教育会との関わりも示す。同会は杉浦の重要な活動の場であり、27では辻新次に誘われ活動に参加し始める情景が、17では主要メンバーの肝付兼行から会合の情報を得る様子もうかがいあがる。③の父・重文は、一八九九年一月一七日没。23には重文の遺著についても触れられている。④の近衛篤磨・佐々木高美ら対外硬派との交流や、⑤の渡清（一九〇二年四月二二日に神戸より上海へ渡り、五月二三日に帰京）など比較的知られた事柄に関するものも含まれ、『近衛篤磨日記』（全五巻、鹿島研究所出版会、一九六八―一九六九年）など関連史料とつきあわせると興味深い。前述の渡辺論文でも二次文献に拠った叙述も少なからずあるが、そこへ本書簡群を対置することで、明確な裏付けや新事実への手がかりも得られるだろう。

本稿の作成に際しては、書簡の写真を吉田が撮影し、谷川とともに翻刻・校訂を進めた。杉浦個人の研究はもちろん、彼をとりまく明治中・後期の政治家・官僚・学者・教育家たちの動向をさぐる糸口となれば幸いである。なお、書簡は発信者姓名の五十音順で配列し、通し番号を（複数ある場合は枝番も）付した。句読点は適宜加えた。改行は紙幅の関係上一字空白などに置き換えた箇所もある。合字は平仮名に開いて表記した。年月日は発信者の没年や内容などから推定できるものを（ ）に入れて示し、明治期であることが確実な場合は（ ）の上に「明治」と付した。

1 青戸波江 明治（35）年6月11日

拝呈仕候。本日ハ御遠方御越し被下難有奉存候。其後高輪ニ参殿、是迄の順席委曲御話申上候。第二問題ニ付ても（佐々木）高美君も全く同精神ニ有之候。扱例の城南荘にての相談会明日午後四時前後より相聞き度候間、先生乍御迷惑其頃同所へ御来車被下候様申上暮との事ニ御座候。小生病氣も格別（佐々木）の事にも無御座候間、同時刻にハ必可参伺候。久保・須田両氏へハ小生より可相通候。先ハ不取敢右申上候度如此ニ御座候。草々頓首

六月十一日 青戸波江

杉浦先生侍史

【註】近衛篤磨を中心に、佐々木・島津忠清らの国粹主義グループが、一九〇一年一月に東京・内幸町の借家を共同会合所として借り上げ「城南荘」と名付けた。『近衛篤磨日記』には同日二日条に初めてその名が登場する。

2 浅田徳則 明治(29)年4月11日

貴書拝読、益御清適奉賀候。赴任後彼此官務囀集御疎音仕候。幸二頑健御安意可被下候。扱御来臨御座候水谷生之事ハ、目下相当之位置無之、過日突然罷存候故、差向当方ニ寄寓為致候。御熟知之如く本人ハ至而正直一偏之人物ニ相見へ候故歟、未タ其朝ヲ能(期カ)は見るニ不至故歟、屢不幸ニ陥リ氣之毒ニ御座候。但タニ從來警察のみの経歴ニ而、美筆ハ長処ニ有之様ニ相見申候。其内相当之場処有之候得ハ都合可然候得共、自然群馬県の武田氏も御適任御座候ハ、御嘱托相成候様致候。同氏ハ長野在勤中ニ任用相成、且生よりも曾而相托候事有之承知御座候。実ハ当地へハ無抱ものより呼寄セ可申者有之。余リ数名一時之内氣相招キ候事ハ不宜候而、可相成ハ他之位置相扣サセ度候。武田氏へハ生よりも其内一書嘱托可致候。右不取敢拝答旁申進候。草々不一

四月十一日 浅田徳則

杉浦賢台梧下

【註】武田は法制局参事官、長野県警部長等を経て一八九四年二月から九六年一月まで群馬県書記官。長野県在任中の知事が浅田(在任は九一年四月〜九六年二月)。

3 伊澤修二 明治(35)年2月26日

拝啓仕候。陳ハ此度小生共同志者相謀リ、別紙簡略章程の旨意に依り泰東同文局相設候に付、老台にも何卒右御賛成之上、本局名誉局友に推薦の義御承諾被下度奉願候。頓首

二月廿六日 伊澤修二

杉浦重剛殿

【註】泰東同文局は一九〇二年に伊澤を中心に「清韓両国啓蒙の一手段」として図書・教育関係所物品販売を目的として創設された団体(『東京朝日新聞』一九〇五年四月一二日付)。

4-1 磯野徳三郎 明治( )年3月25日

拝啓 過日者失敬仕候。扱成城学校ニテ博物科之教員入用之由ニ候が御心当之人は無之候や、御周旋被下候へ者至極ニ御座候。学力ハ左程二なくとも寧ろ教授ニ練熟之人はしき由ニ御座候。学科ハ 動植物・金石・地文・地質 等随分八百屋主義ニ御座候。右御依頼まで。草々不一

三月廿五日 竹翠



梅窓学兄坐辺

【註】「竹酔」と次の「竹酔」は同一人物、翻訳家・評論家の磯野と推定。磯野は久留米藩貢進生、大学南校にて杉浦と同期。『東洋学芸雑誌』「日本」の創刊メンバーで、東京高等師範学校、日本中学校でも教鞭を執る。一九〇四年八月、磯野逝去の報に接した杉浦は「哭磯野竹酔」と題した七言絶句を詠む（全集第六卷、一二六頁）。

4-2 磯野徳三郎 明治（一）年5月27日

拝誦 此度ハ随分叮嚀なる病氣引起し、御校の用も相出来不申御氣之外無御申上候。実ハ少々思ひ立ちたる事も有之、御校ニ出勤仕候事も六かしかるべきかとも乍不本意存居候、兎ニ角廿日には一寸出校仕御相談可致、貴兄ニも一月余御病臥なりしとの事、御大切之事ニ御座候。御封入被下候金子は正ニ辱相受仕候。先ハ乍早計御返書迄、草々敬具

五月廿七日 竹酔拝

梅窓兄梧下

5 今井恒郎 明治（30）年（1）月12日

拝啓 爾来御無音ニ打過多罪御海容被成下度候。扱小生辞職許可ハ来月ニ候義、種々の都合有之、早速単身上京可致候処、全校生徒へ決別致度存候。生徒の帰校と相伝居り漸く一昨日送別会を済

ませ昨日彦根出發、一兩日美濃路ニ趙遙<sup>(註)</sup>し来十四五日頃入京拝顔之積ニ御座候。扱此度之件ニ付てハ公ニ対し私ニ対し多罪遁る、ニ所なく唯々拝眉万謝を期し居候。悲惨慨怛心緒猶麻の如く乱れ居り筆不能尽候間、伴情御推察を仰度候。勿々頓首

十二日 恒郎

杉浦先生

【註】今井は滋賀県尋常中学校校長。一八九六年、県議会による同校寄宿舎増築案否決に抗議し、同年末に辞職。『彦根東高百二十年史』（創立百二十周年記念事業実行委員会、一九九六年）には生徒の回想として、翌年一月八日から九日にかけて送別会を行ったとの記述があり（二三〇頁）、書簡とは一日ずれるがこのときのもものと推定。杉浦の日記「随遊日録」一八九六年四月一〇日条にも今井は登場する（全集第六卷、四六頁）。

6-1 色川園士 明治（一）年3月10日

尚々西村貞君へ御無音致し居り候間、宜敷御致声奉折候一翰拝呈 時下御賢膝ニ可被為涉為国家奉賀候。借御送付被成下候泊雲遺稿一冊本日着、早速一式葉閲読仕りふと疑團を生し候。抑此書は何の為ニ送り被下候哉。「文もなく口上もなくちまき五把」にて古句の意味は解し得へくも、此書には種々金玉の論あり、不測翁説などは尤も感銘仕候故、是等を以て相益せよとの思召ニ

候哉。或ハ先便御願仕候件ニ關係ある事ニ候哉。何分愚昧之小生ニハ解しかたく御座候、尊意のある所を御一報被成下度、其上にて御礼可申上候。恐々頓首々々

三月十日 園士

杉浦先生

【註】西村は足利藩貢進生、開成学校寄宿舎で杉浦と同室（全集第六卷七二三頁）。文部少書記官、参事官、視学官などを歴任、大日本教育会でも活躍した（平田宗史『欧米派遣小学師範学科取調員の研究』風間書房、一九九九年）。一九〇四年没。『泊雲遺稿』は一八九五年八月、大塚要の編集により刊行された小冊子。

6-2 色川園士 明治（一）年5月21日

一翰拝呈 偕過日ハ御病人有之候中へ推参御邪（感）广仕候。其御御内話仕候体育会之義、共人を尋ね居り候よし風に承り居候。乍恐雅兄（義人）より奥田氏辺へ御推挙被成下度、小生も不及ながら百万尽力可仕候。然し中八九成効を見得る形勢に至る迄、本人・西村氏（貞）へ不申入方よろしからんと奉存候。貴意如何ニ被思召候哉。老陳之實下へ対し婆心ニ失し候ハ、御海怨ニて候

五月廿一日 色川園士

杉浦先醒

【註】「体育会」は一八九一年に成城学校内に設置され、翌年日本体育

会と改称（現日本体育大学）した組織を指すと推定。西村は八一年末、体操伝習所の主幹に就任、体育教育に取り組む。

6-3 色川園士 （一）年6月27日

一翰拝呈 時下愈御榮清ニ被為涉大賀々々。偕昨日参上之節御願申上候木原元次氏さし出しにて御座候。御面会之上意中御聞取被成下、何分にも御周旋之程幾重ニも御願仕候。先は右御依頼迄。恐々頓首々々

六月廿七日 色川園士

杉浦先生

7-1 岩崎行親 明治（35）年3月10日

謹啓 時下弥増暖氣相催候処、誠御健勝奉欣賀候。扱先醒には今般御渡清の御事御決定被成候よし、久々海外御漫遊御健康の為殊ニ邦家の為可賀事ニ御座候。小生事も来四月五日には会議開かれ候間、夫迄には上京未タ御出發無之ハ御面会及御送別の期も可有之差伺候。本日千頭氏（清臣）に御面会いたし候へども、御出發期相分り不申。清国御視察相済候ハ、御帰途万一台湾（寄力）にても御立寄被通候ハ、是非とも当地も御帰港を願上度。千頭氏も近々上京、兩人共帰郷の比に御立寄被下候ハ、難有存候。尚御面会の期平日ニ

てと想像ハ仕候へとも、其以前御出発の節ハ御寸暇あらば端書にても御一報願度候。先ハ右御伺旁、草々

三月十日 行親

杉浦先醒侍史

【註】岩崎は讃岐出身、内村鑑三・新渡戸稲造らと札幌農学校に学ぶ。卒業後官吏となるが辞し、日本中学校の前身・東京英語学校で教鞭を執り、同い年の杉浦と交わる。その後杉浦の橋渡しにより一八九四年に鹿児島尋常中学校校長、一九〇一年には第七高等学校造士館（同七月開校式）の初代館長となる（岩崎行義『岩崎行親』松下兼知、一九七四年）。

7-2 岩崎行親 明治（一）年11月15日

謹啓 小生事一昨十三日午後六時の汽車にて帰郷の途ニ就き候。上京中ハ如例御厄介相懸候段奉謝候。出発前是非今一度何頗致度存居候処、吉田・久富両氏既ニ同日徳山出發鹿児島ニ向ふとの電報上拜し居候間、出立差急御無音仕候段、不悪御思召被下度候。安藤氏ハ小生の後任ニ推薦の事は前田君御尽力にて同人は承知被成候よし。柏田知事（盛文）とハ小生か出發の前日も申開置候間、都合宜敷処と存候。但小生より湯原視学（元一）へ頼みたる方向の返信、出發の時にて参り不申、安藤採用の儀湯原氏の意見如何と被存候。安藤は温厚なる人物、別段是と申欠点なし。唯妻君の事より九州

地方にては失敬可致と存候。帰郷の上本人をも勸可申入候間、前田氏へ其旨御通シ被下度候。唯今殊に心配致候ハ安藤の処遇ニ有之。右交換問題ハ実ニ止を得ざるに出たる次第ニ御座候。先ハ右御依頼旁其外期後便下。草々

十一月十五日 行親

杉浦先醒侍史

【註】柏田が「十一月」に県知事を務めたのは一八九七年の千葉、九九年の茨城、一九〇〇〜二年の新潟においてである。

8 鶴飼退蔵 明治（31）年10月6日

貴墨今拜見仕候。如來示秋冷之節ニ御座候処、益御清安奉恭賀候。其後ハ相絶御座候。可拜見処多罪一半ニ御海涵被成下度候。左様之例先師二十五年祭及藤樹先生二百五十年祭之節ニも御差支之趣ニ而、御来會無之遺憾之至ニ御座候。扱左様御申越相成候安本丹（符字）ハ早速情写為致、去ル六月中在京京親族池田謙一郎事暑暇帰省いたし、全人東帰之幸便ニ付シ送呈候。既ニ承而無事ト存居候処、此度御書面ニ接シ仕候テ、全ク全人失念いたし其儘打捨置候事ト被存候間、早速申遣し候。御送呈為致可申候。右憚候事ニ而爰ニ存知候次第、不悪御承知被成下度候。右不取敢存居候迄、如此御座候。勿々不宣

十月六日

退蔵拜

杉浦賢契楮下

【註】「先師」は鶴飼・杉浦共通の師で、一八七三年に没した儒學者・巖垣月洲。中江藤樹没後二五〇年祭は九八年九月二五日に藤樹書院にて開催。「書画目録」では発信者は「三好退蔵」と比定されていたが、内容より鶴飼と考えられる。

9 大石正巳

(一)年1月14日

昨日の御話に依り本日内務大臣え面会申入れたる処、既に土方伯(久元)

よりも同人を申込みあり候趣き、然る処最早後任者ハ決定ありて、甚た残念ながら今回ハ事間に会ひ兼候との事、右御通知仕候也

一月十四日

大石正巳

杉浦大人

【註】土方の伯爵授爵は一八九五年一〇月。

10 大浦兼武

明治(32)年11月20日

拜啓 昨日貴翰持参之岩田清三郎氏二面会、委曲承及致候。尚其為貴台ニハ尊大人様御篤疾ニ付、俄ニ御帰省相成之趣承り驚愕罷在候処、今朝之新聞紙ニテ終ニ御養生之効ナク御逝去之由承知仕、誠ニ不勝痛悼之至御一同様御愁傷之程奉察上候。依而不取敢御申詞申述度如此ニ御座候。草々敬具

十一月廿日

大浦兼武

杉浦重剛様侍史

追テ岩田氏希望ノ檢疫事務官ハ、目下ノ処定員モ既ニ充チ、又希望者モ頗ル多数有之候趣ニテ、旁々余程六ヶ敷トハ被存候得共、尚精々心掛ケ置其向ケヘモ相談可然候間、左様御了知相成度此段申添候。再拜

11 小川銀次郎

(一)年2月4日

拜啓仕候 爾来意外之御疎遠罷在候処、益御清祥奉大賀候。扱山根ハ和田氏一身上ニ付種々御心配被成下寔ニ難有、大兄ハ勿論推すも屹怪此事ニ御座候。若ハ中学会の方も都合有之候為メ、先頃より大兄とも相談致居候際、偶御高配ニ而相纏り候得ハ幸福至極ニ御座候。何卒此上御尽力被下候様、只管奉願上候。右御願旁御礼として一寸可罷出筈ニ御座候得とも、近頃家内ニ病人有之毎日白手の診断ヲ煩ハシ居候始末ニ付不得其意候ニ付、乍勝手に書状御願申上候間不確御酌取置被下度候。余ハ為有万々可申上候。草々

二月四日夜

銀次拜

杉浦賢台侍史

【註】小川は政教社の棚橋一郎と計り、一九〇三年に私立東京高等女

学校 (現東京女子学園中学・高校) を設立。

12 落合直文 明治 ( ) 年 6 月 29 日

愈御清福賀上候。さて過日ハわさく御たすね被下候趣、生憎不在御申訳も無之候。直ニ参堂の心得に候ところ、例の外山先生(正一)一条の拙著の校正ニおはれ今ニ御不沙汰仕居候。小生先生の高風を慕ふ之ニ気あり、さる二いまたしミく御はなしも仕候機会をえず、残念このうえなからずして一夕御邪魔仕度尋居候。先ハ過日の御わびをかね一筆を御呈し候。草々敬白

六月廿九日 落合直文

杉浦先生侍史

〔註〕 外山は一九〇〇年三月八日没。

13-1 加藤弘之 明治 (30) 年 7 月 13 日

拝啓 其後益御清福奉賀候。然レハ長々御配意ヲ仰候三男馬渡俊雄事、今般第一高等学校入学試験幸ニ及第致候。此全ク従来之御厚配ニ基因候事也。只難有奉存候次第ニ御坐候。乍略義一応御礼申上置候。匆々不悉

七月十三日 加藤弘之

杉浦重剛殿

〔註〕 加藤の三男・俊雄は馬渡家に養子として入り、一八九七年九月に一高大学子科に入学 (第一高等学校一覽自明治三十年至明治卅二年一六一六頁)。のち愛媛県・福島県知事、東京市助役などを歴任。

13-2 加藤弘之 ( ) 年 6 月 3 日

拝啓 其後御無音ヲ申上候処、益御清適奉賀候。然レハ郁文館へ参候生徒 岩橋靖雄 十六七歳 と申者、追々品行と危険之年齡ニ付何卒貴熟へ相願、十分之御監督ヲ仰度旨其父より申義、小生より願呉候様申聞候。何卒御許可被下候様ニ奉願御座候。仍而可然相頼申御許可相成候ハ、其父参上万端相伺候様可為仕候。仍而此段申上候。別端書ニ御許否之御一言御答奉願候。早々不悉

六月三日

(朱筆) 「上二番町四十四」加藤弘之

杉浦重剛殿

14 川島純幹 明治 (35) 年 (4) 月 5 日

拝呈 春到之節ニ御座候処、益々御多祥ニ可被為在奉拝賀候。陳ハ清国へ御出発之日時は已ニ御決定相成候や御伺申上候。小生儀客月十五日より家族相纏めのため大分県ニ罷越シ居候処、同年九月ニ家族と共に当地ニ着座候。帰来年度開始等有之多忙を極め居

候。前述之件御伺申上度、御左右奉伺を兼ね如此ニ御座候。拝具

五日 純幹

杉浦先生閣下

15 木内重四郎 明治(30)年11月9日

拝啓 先日ハ御多忙の折ニ推參御無理ノ儀願出候所、早速御承引被成下、難有御礼申上候。小生よりも亦長文ヲ菊池氏(藤二郎)ニ寄せ、主トして本人蝶進ノ妨トナラヌやう熟考セラレ度旨申遣ハシ、又溝淵氏(進馬)ニも書ヲ寄せ、直々ニ千葉ノ請招ニ応スル決心アラハ、菊池校長ニ向テソノ意志ヲ明白ニ発表し最後ノ決答ヲナスヘシト申つかハシ候。今日溝淵氏より電信ニテ

転任ノ許可ヲ得テ之ヲ承諾ス

トノ返答有之。沢柳氏(政太郎)ヘ向け同氏より同様ノ電報有之。

菊池氏も到欧本人希望ノ在ル所ヲ明白ニ了解したる結果、許可ヲ与ヘタル事ト存候。三週日ニ亘(マ)ヘル困難ノ談判モ爰ニ至り首尾よく成功致候段、全然先生御勧告ノ結果ト存候条々奉感謝候。

千葉県知事(柏田盛文)ニも只今申つかハシ、即刻上申ヲイソガセ候間、近く

ノ内ニ発表ノ運ニ相成可申ト存候。ソノ内參上御礼可申上候へ共、取いそぎ右申上候。勿々頓首

十一月九日夜 木内重四郎

杉浦先生帷下

〔註〕 木内は杉浦の東京大学予備門長時代の教え子、岩崎弥太郎の女婿、京都府知事や貴族院議員を歴任。菊池は一八九七年四月に千葉県尋常中学校長に着任、翌年六月には第二高等学校長へ転じる。その後任が溝淵。二高への転出、および一九〇一年四月の東亜同文書院教頭就任も、杉浦の勧めにより実現したものである(森田美比「菊池謙二郎」耕人社、一九七六年)。

16 菊池謙二郎 明治(35)年5月30日

拝啓仕候。長崎福岡へ御安着之御端書拝見仕候。定めて昨今中に御着京遊はされ候御事と奉察候。書院の設備も略々片付候に付、さる十九日上海出發南京へまゐり、根津氏(一)と共に劉総督(珊)ニ面會致申候。劉ハ聞きしよりも元氣にて一時半余の會談ニさしたる疲労も不相見候。一見いたし候処篤実なる上品なる老翁ニ御座候。南

京の学校経営ハあまり果々敷模様に無之候。根津氏御預り致候日本刀ハたしかに劉ニ相贈り申候。領事館天野の話ニ、先生御尋

之長森(藤吉郎)と劉との会見時日ハ、小田切(万寿之介)よりの申越によりすでに相定まり居候との事ニ有之候。かの渡邊の子息ハ先生と行違ニ当地へ

まゐり、今日面會致申候(院長書生の居室便所等一見致させ門限等も相話し申候)。当人の意向ハまだ定まらず候。小生ハ今夜乗込明朝未明出帆の神戸丸にて長崎迄まゐり、四日ニ帰參のつもり

二御坐候。根津氏ハ本日南京出發明日当地着の筈にて、七日出帆の伝国丸にて帰東の事ニ御座候。其他別ニ可申上ほどの事も無之候。敬具

五月三十日夜

謙二郎

杉浦先生座下

【註】このとき菊池は在東亜同文書院・教頭兼監督。根津は同文書院初代院長、劉は清朝洋務派の两江総督兼南洋代理、小田切は上海総領事、長森は大蔵省官房長。

17 肝付兼行 明治（一）年12月18日

拝啓 昨夜は御休息之処御妨ヲ仕り恐縮此事ニ御座候。帰途塩谷へ立寄、教育会近日ノ経過ヲ承り候処、去ル十三日小生ノ退去後他ヨリ副会頭新設説出タルモ竟ニ成立セス、全ク規則改正委員ナル者会頭指命ニ定マリ、全夜直チニ改正方案モ成り会務主幹ナル者（有給）新設ノコトニ立案ニナリ、廿日総集會（小生未タ其通知ヲ受ズ）ニテ可決候へは、有志者暗ニ意ヲ西村氏ニ擬シ居候趣ニツキ、今般は克ク此立案ニ賛成致シ置たるは如何。一応得貫意度候。匆々

十二月十八日

肝付兼行

杉浦重剛様

【註】大日本教育会（一八九六年には帝國教育会と改称）の総集會（総集會にあたる）は例年春から初夏の間に開催されるため、ここでの「総集會」は臨時総集會と思われるが、「会務主幹」設置案が実現した形跡はない。

18 陸羯南 明治（29）年11月21日

拝啓 小生去十六日帰京仕候。早速拜謁可仕候処、帰京以来例之件ニ而無寸暇為ニ御不沙汰仕候。扱弘前東奥義塾之長なる西館武雄氏ハ竹馬之友ニ有之候処、在郷中ニ訪来り、右塾生出生之時ハ必ず日本中学校へ入学せしめ度ニ付、此事ヲ大兄迄小生より予め御願上具候様懇談有之候。御差支も無之候ハ、彼塾と御校と以後連絡相通じ候事ニ御認可被下度、且ツ其事御極め被下候ハ、右西館氏へ大兄より御承諾之旨御申遣し被下度候。次ニ目下右塾生ニ而新ニ上京せし者二人有之、是ヲ手始ニ先ツ御校へ臨時ニ入学御計らひ被下度願上候。且ツ右二生ハ称好塾ニ寄宿願出候付、御塾舎ニ余席有之候ハ、直ニ御許し被下間敷候哉。又右両生ハ義塾ニ四年生なるヲ以テ、御校えも右同級へ入学致度志願之由。何も明朝なり貴邸へ為伺候旨、御ウルサク可有之も御適ひ被下度、両生より直接ニ拝顔可致候。細事ハ近日中參上之上可上候。用事迄、

草々頓首

十一月廿一日

実

杉浦先醒机下

本日解備之為メ別して多忙ニ付、御書面先ツ上進候

〔註〕西館は一八九六年一月に副塾長として東奥義塾の改革に着手、同年六月に本多庸一に代わつて塾長となり、文部省から徴兵猶予校認定をうける。だが翌年三月、塾設立者との衝突により西館以下職員は連袂辞職する（『東奥義塾の歴史』、東奥義塾・東奥義塾協賛会、二〇〇二年、九五頁）。陸は同年一月一四日頃まで弘前に滞在、一六日に帰京して「例之件」、つまり二十六世紀事件（『日本』も発行停止）に關して寸暇なく事にあつてゐた（『陸羯南全集』第一〇卷、三三一頁）。

19—1 佐々木高美 明治（35）年1月15日

拝啓 近衛公に面会、田邊氏の件開合候処、適當の後任者有之ま  
で就職可致旨之答ニ有之候段、教頭等之所ハ万事御委任之由説明願  
呉、書院にて拜晤可得貴意候得共、御考案之御都合も有之候趣、  
不取敢御書中申上候。 艸々頓首

一月十五日 高美

天台先生硯北

〔註〕東亜同文書院の教頭職は田鍋安之助が務めていた。文中の「田邊」はあるいは「田鍋」の誤記の可能性もある。佐々木は一九〇二年七月八日に逝去。

19—2 佐々木高美 明治（一）年2月5日

拝啓 春寒難凌御座候処、弥御清榮奉賀候。陳ハ学校に關してハ  
万事不一方御尽力奉多謝候。拙者事も去月末にハ上京之旨ニ御座  
候処、廿四日頃より流行感冒ニ被侵稍く、此頃全快致候様の次  
第、御無音之段奉謝候。彼是御相談を要候件御座候趣につき、繰  
合上京仕度存候得共、十日前ニハ何分差繰兼、甚以乍勝手御書面  
にて御照會被下候乎、若くハ遠路恐入候得共御一宿にて御枉駕被  
下候乎、兩様の内ニ相願度候。日限の所ハ何日にても宜敷（尤も  
八日にハ祝勝会を催候趣に付、式ハ出席致候様被奉存候）一寸御  
報奉願候。先ハ右要用迄如此御座候。 敬具

二月五日 高美頓首

天台先生研北

19—3 佐々木高美 明治（一）年3月7日

拝誦 弥御清榮奉賀候。陳ハ拙者儀帰京ハ中旬過ニ可相成、其前  
ニ帰京ハ何分六ヶ敷奉存候間、御來參之旨ニ対し左ニ御答申上候。  
一月謝増額之儀、至急御同意ニ御座候

一運動会之儀も拝承仕候。陸上となすか競漕会となすか、若くハ  
景氣ニより両方なす乎、期日ハ來月頃可然や、其辺諸君と御相談  
願度候



一新聞紙へ学年募集の広告之件ハ如何御座候哉、徐ニ御掲載被成てハ如何

右之処愚存之儘申上候。御考之辺御報被下候ハ、幸甚ニ御座候。右迄、艸々頓首

三月七日 高美

天台賢台研北

19 | 4 佐々木高美 明治（一）年4月28日

拝誦 御来示之件敬承至極御同意ニ御座候間、可然御取計之程奉願度候。又明後日ハ御繰合付候丈、御早く御来光御助力被下度、此段奉願候。取込中右まで、艸々頓首

四月廿八日 高美

天台先生座下

19 | 5 佐々木高美 明治（一）年12月30日

拝啓 愈御清康奉賀候。陳ハ歳末御多端之際御迷惑トハ奉存候得共、得御意度儀有之、明廿一日午前九時半より十時頃参上仕居候。何卒御繰合御在宅被下候様致度、出余期拝晤候。艸々頓首

十二月廿日 高美

天台先生視北

20 沢柳政太郎 明治（31）年（10）月9日

拝啓 陳ハ八田文学士御紹介仕候間、御面会被下御高見御示し相成度、同氏ハ今般佐渡尋常学校長ニ赴任可相成歟ト存候。将来有為之教育家ト存候。右迄、草々

九日 澤柳生

杉浦重剛先生

【註】 八田は一八九八年一〇月一〇日に佐渡尋常中学校長任命の裁可がなされ、翌一日に発令をうける（国立公文書館所蔵『任命裁可書 明治三十一年 任免卷二十三』）。

21 相馬永胤 明治（31）年11月9日

拝啓 時下秋冷之処、愈御清適相成奉恭賀候。然者迂生知人三井大作義、昨年大学卒業致候処、前途之方計上ニ付老台之御嚴訓相願度旨申居候間、御多忙之際御迷惑トハ奉存候得共、一応御逢被申下、本人之所望御聞取之上、御引立被下度奉希候。右願用旁本人御紹介迄如此ニ御座候。勿々頓首

十一月九日 相馬永胤 拝

杉浦老台机下

【註】 三井は広島県出身、一八九七年七月に東京帝国大学史学科卒業（同年卒に坂口昂・隈本繁吉ら。『東京帝国大学一覽』より）、この書簡のち広島県立広島中学校教員となる。相馬は彦根藩出身、専修学

校（現専修大学）創設者、弁護士、第一回衆議院議員選挙で当選。のち横浜正金銀行頭取。

日発行。ちなみに棚橋の「老母」純子は東京高等女学校の校長も務めた教育者。

22 田中光顕 明治(31)年5月19日

益御万福奉拝賀候。陳は旧膳所藩士贈位之事ニ関シ、暫時得拝晤度候間、明廿日午前八時頃一番町官舎へ御枉駕被下度御願申上候。万迄其時不尽候

五月十九日 光顕

杉浦老台研北

【註】一八六五（慶応元）年、膳所藩士一名が將軍家茂暗殺策動の嫌疑をかけられ、死罪となった。彼らのうち多くが、田中が宮内大臣であった九八年七月四日、正五位の贈位をうけている。

23 棚橋一郎 明治(34)年11月29日

拝啓 過日ハ御老考之御遺著御恵投被下難有拝見、目下老母ニ於而敬読中ニ御座候。扱御尋之仁ハ現今跡見女学校と順天中学校とに奉職中ニ有之候も、何か御都合之義も候ハ、為相伺可申候。不取敢拜復而已。勿々頓首

十一月廿九日 棚橋一郎

杉浦先生侍史

【註】杉浦の父・重文の遺著「旧膳所藩学制」は一九〇一年二月一

24 田邊信正 ( )年2月2日

拝啓 余寒難過御座候処、益御多適奉大賀候。小生代旧瓦全乍憚御安慰可被下候。扱ハ都下北陣の雲ヶ畑と申村方にて狩猟したる牝鹿一蹄懸御目度候。若浅田君へ呈送之序を以便宜一緒ニ鉄道早達便ニ相托置候間、多分明三日正午頃ニハ浅田邸へ到着之筈と奉存候間、遠方乍御面倒御取寄セ御吟味被下候ハ、幸甚此事ニ御座候。為其如此御座候。早々拝具

二月二日午後六時 田邊信正

杉浦先生侍曹

25 | 1 千頭清臣 明治(29)年7月4日

此度は不図も却而非常之御心配を掛け、実ニ何とも申訳無之次第ニ御座候。先刻切斷致候処、忽ち全快之気分ニ相成、或は明日にも他出出来可申かと存候。(亀之助)三崎氏へハ一時ならハ參事官なり又書記官なり、内務之都合次第いづれにても異議無之との事、返事致置候。書外之件ハ拝顔の節、勿々

七月廿四日 清臣

杉浦兄

〔註〕 千頭は土佐出身、杉浦の妻・春猪の兄。一八九三年六月から九四年一〇月まで高知県尋常中学校長、九五年一二月から第二高等学校英文学科主任、九六年八月一二日には内務省に転じ同書記官兼参事官（奏任四等）を拜命。その後九七年一月〜九八年八月栃木、同八月〜一九〇〇年一月宮城、同一月〜九月新潟、同九月〜〇七年二月鹿兒島の各県知事を歴任。

25 | 2 千頭清臣 明治(34)年10月27日

早速御見舞状を賜わり万謝至リト存候。借学校を始め樺山伯邸及ヒ官舎対ハ無事にて誠ニ幸なりとも、県聴はすでの事やらるゝ、ところ一時ハ大ニ心配致候。

右之如キ直接之関係ハ別問題ト致シ、当市にて（しかも）最も有<sup>(ママ)</sup>福なる部分）三百六十戸以上もやけ候事故、市一般之盛衰ニ大關係を及ボシ心痛之至ニ御座候。本日も折角市長及ヒ市之有力者共ト善後策ニ付協議致候。

〔大庭〕 菊池文部大臣去ル廿二日着鹿、昨日無事当地出発○造士館開校式も岩崎校長之一方ならざる心配にて目出度結了致候。<sup>(岩)</sup> 過日は小村大臣へ夙夜話被下候由、盛唱此事ニ御座候。北海道ハ目下之所六ヶ敷事ト存候。就テハ愛知県にても異存無之候間、又々御都合次第御論合被下度候。

乍併本日之御手紙ニ日本新聞困難ニ付、<sup>(近衛篤磨・佐々木高美)</sup> 近・佐両氏心配中云々拝見候処、実ハ結局之問題ハ〇〇ニ外ならざる次第ニ有之候間、若シ三井辺へ關係出来候様之事で相運候得は、彼の外資ニも問題も有之、彼是好都合ト存候。御一考被下度候。不取敢御礼旁如此御座候。勿々

十月廿七日 清臣 重剛兄

〔奥封上書〕 「御一読後火中へ」

25 | 3 千頭清臣（前田元敏・杉浦宛）（ ）年2月27日

本県より出稼移民之取扱ニ関シ大々失策、外務省へ弁明之致方無之充分ニ免職之価アルト自認致居候。本モ尚ホ事情取調中ニ付未タ辞表ヲ呈セス内情ハ全ク主任ノ不正ニ基ク事ニテ、責任問題之外ハ何等之事モ無之候。此段御安心被下度候。大略之事情は齋藤氏より宜敷知被下候。頓首

二月廿七日 清臣

前田君 杉浦君

25 | 4 千頭清臣 明治（ ）年10月15日

拝啓 昨夜ハ失敬、菅沼氏ハ少々都合有之候間、平戸の方ハ御見合せ被下度候。拝顔の上申述度件有之候得共、本日も五時過ニ退省致候のミならず、來客有之候ニ付御不沙汰、明日にも閑有之候得は御訪問可仕候。勿々頓首

十月十五日

清臣

重剛兄

【註】文中「菅沼氏」は長崎県平戸出身で南進論者として知られる菅沼貞風の可能性もあるが、「退省」との文言から千頭の内務省勤務時代のものともみた場合、菅沼はすでに逝去（一八八九年没）しており、該当しない。

26 珍田捨巳 明治(28)年3月23日

拝啓 時下愈々御清康奉恭賀候。然は今般当国政府ノ官立ナル日本語学校ヲ当仁川ニ新設ノ為メ、月俸四十円ニテ右教員名備聘方依頼致來候。就而は此際之事ニも有之候得は、為邦家充分ナル熱心ヲ以テ斯ノ教育ノ為メニ尽力致候。慎重高尚ノ人物ヲ要シ候間、御手教之段恐縮之至ニ御座候得共、御見知り合ヒ之内相当之人物至急御撰択御遣シ被下候様願上度、学校之性質其他左ニ詳記、此段御依頼申進候。敬具

三月廿三日

仁川領事館 珍田捨巳

杉浦重剛様

学校ノ性質

主トシテ朝鮮人ニ日本語ヲ教ヒ、併セテ日本語ニヨリ新智識ヲ授ケ、各官庁ノ官吏学校教員学ヲ養成スル所ニシテ、程度ハ本邦ノ高等小学ト尋常中学トノ中間位ノ積リ

人物其他

前記之学校ニ有之候得は、中学校ニ従事ノ経験アリ、又普通学教授シ得ル学識ヲ有スルヲ要ス

学校モ創立ノ際ニテ最初ノ教員ナレハ信用ヲ博シ、学校ノ隆昌ヲ計リ度旁、成ルヘク妻アル人ヲ希望致候ヘハ相当ノ人物御見立願度候

当地ニテハ夫婦兩人ニテ下女傭人召使致テモ一ヶ月廿五円ナレハ生計相立可申ニ付、月俸四十円ナレハ貯蓄モ出来可申候

赴任旅費ハ独身者ナラハ五十円、妻携帯ナラハ百円当地來着ノ後支給可致候

尤モ着任後一ヶ年以内ニ解雇スルトキハ更ラニ前記之通り帰国旅費ヲ給スヘク、教員ノ方ヨリ一ヶ年以内ニ辞職スルトキハ赴任ノ旅費ヲ返附スヘキ事

27 辻新次 明治(20)年1月17日

拝啓 尔後愈御清康奉賀候。然ハ大日本教育会ニ於テ毎月一回講

評会相開候所、御多忙中恐縮之至り御座候得共、御都合宜敷時何  
ナリ御演説被下度御願申上候。何卒御承諾被下度不堪切望候。先  
ハ右願用迄、早々不悉

一月十七日 辻新次

杉浦先生侍史

【註】杉浦が自ら記した略歴書「梅年代記」には、「丁亥一月 大日本  
教育会ニ關係ス」とある（全集第六卷、五二三頁）。

28 手島精一 ( ) 年3月17日

拝啓 過日は御来校大慶ニ奉存候。其節御示談之発動機ニ関スル  
件、別紙之通調査為致候間、右にて御承知被下度、將又宇都宮未  
亡人ニ関スル儀も女子職業学校女教員中ニ之モノへも申述候処、  
差当恰適之場処も無之候へ共、尚精々心掛ケ置可申候条、右様も  
御承知被下度、先ハ要旨得貴意度、早々頓首

三月十七日 精一拝

杉浦賢台座下

【註】宇都宮は化学者、日本で最初にセメント・耐火煉瓦・炭酸ソーダ  
を製造したといわれる。一九〇二年七月没。手島は工業・実業教育の  
先覚者、一八九〇年に東京工業学校校長に就任。共立女子職業学校  
(現共立女子大学)の創設者の一人。

29 寺尾寿 ( ) 年5月28日

〔前欠〕<sup>(二二カ)</sup>服部ヲ御推挙被成下間敷哉。服部ハ御存ノ如ク已ニ数学  
(三角法測量迄) 及物理学ノ免状ヲ有シ候ノミナラズ、今回ノ檢  
定ニ於テ解析・幾何・微積分及化学ノ試験ニ及第シ、殊ニ微積及  
第八文部省ノ檢定始リテヨリ未曾有ノ事ニ有之、学力ニ於テハ現  
今ノ相場ニテ優ニ四十五円位ノ価値ハ有之ト相認ラレ候。其人柄  
ハ老兄モ已ニ極御存シナルベク、才氣少シク過鋭ノ方ニテ、其為  
變キニ二回失敗ヲ来タシ候者ニテ、通常ノ教員ヨリハ寧ロシツカ  
リトシタル校長ヲ補佐シテ教頭ノ位地ニ立ツコトガ長所ナルベシ  
ト存居候ニ付、若シ別記ノコト果シテ事実ナラバ恰モ適當ノ候補  
者ナラント思考仕候。若シ此外ニモ可然位置有之候ハ、御周旋  
被成下候様希居候。有余讓拝姿、用事ノミ匆々申上度如此御座候。  
頓首

五月廿八日 寺尾寿

杉浦老兄坐下

30 内藤耻叟 明治 ( ) 年6月5日

一書拝呈仕候。不順之時候之所弥御健康奉賀候。扱其後も国学院  
出勤仕居候へ共、寸益も無之恥入候次第第二罷在候。此頃承り候へ  
ハ是迄徳川史受持候人他転仕候由、もし来学年受持無之候ハ、

浅学老生にて御間ニ合候ハ、御申付被下度奉願候。且又論語孟書經之類、是迄少年にて受持候由之所もし欠員も産候ハ、老人ニ被仰付候。右相当之事ト存候。是亦受持申度候。如何之御都合候や御勘考可被下候。少年輩よりハ寸益も可有之存シ申候。来学年ハ殊ニ閑暇ニ罷在候間、此段相願試申候。早々頓首

六月五日 内藤耻叟

杉浦重剛様

【註】内藤は一九〇三年六月七日没。杉浦は一八九七年九月に委嘱をうけ国学院学監となっている。

31—1 長岡護美 明治（一）年2月8日

拝啓 時下愈御清福奉賀候。陳は一日御招待申上度候間、来ル十四五十六之三日内御差支無之日御申越被下度、先は御都合承り度早々如此御座候。敬具

二月初八日 長岡護美

杉浦先生侍史

【註】長岡は一九〇六年四月八日没。

31—2 長岡護美 明治（一）年2月10日

拝啓 愈御清適奉賀候。陳は来ル十四日御差支無之趣拝承仕候。

同日別段之設も無之候得共、午後四時より拙宅ニ於テ晚餐差上度候間、遠路何ともお氣之毒ニ存候得共、同刻より御来奉被下度指上候趣、得貴意度早々如此御座候。敬具

二月十日 長岡護美

杉浦重剛殿侍史

32 服部二二（一）年8月23日

残暑未退き兼候処、御満堂様益々御清榮之御事と奉恭賀候。先般浅野氏之件ニ関し御願申上御配慮相煩し恐懼之至りニ候。此度本人上京之上親しく事情を陳し、御看過を賜り度旨申置候。就而は委細御聞取被下候而、御採納之榮を被り度奉懇願候。全人事職務ニ熱心なる事決して人後に落ちず候処、過般其熱心之余り図らずも行違を生じ候事意外ニ大となり、其結果ハ全人に対して甚だ不利益なる口実と相成申候。尤も其間多少之過誤は有之候事なる可きも、素と学校之為を思ふ之余りニ出でたる事に有之候へば、深くは咎む可き事之無之仕候も、事之大となりたる為め留任留も全人之為最も心苦敷事なる可く、且ツは内外ニ於て円満を欠く恐れも有之而も、事生徒ニも相関し居候へば責を引きて辞職する事ハ一般教員之威信ニも相関し候ニ付、右之件に係らぬ様可逃、他ハ榮転致し候ハ双方とも無此上好都合ニ有之候。何卒衷情御洞察被

下候而、本人之願意御採納之榮を賜り度伏て奉懇願候也。恐懼再  
拝

八月廿三日

服部二拝

杉浦先生侍史御中

33—1 花房義質 明治（一）年5月28日

拝啓 益御清榮奉賀候。陳は野田醬油醸造家にて茂木啓三郎之子  
二人、現今小石川農学校二通学シ大庭永成宅ニ居り候得共、大庭  
台湾へ参り候付甚々不安ニ居申候て、先生ニ相願度旨を以て紹介  
被相頼申候。仍て此書相渡し置候間参上候ハ、親敷御聞取被下  
候て、何卒御配容被成下度奉存候。委細は当人并ニ前田道方可申  
陳候。勿々頓首

五月廿八日

花房義質

杉浦重剛殿

〔註〕「小石川農学校」は一八九二年一〇月から九八年一〇月まで小石  
川区大塚窪町にあった私立東京農学校（九二年までは徳川育英会育英  
費分發農業科。現在の東京農業大学）。

33—2 花房義質 明治（一）年7月16日

拝啓 愈御清榮奉賀候。陳は岡山県人にて私立学校之世話致し居

候日置健太郎義、此程出京致し居り尊台御家塾之御模様・御規則  
等も拝見、又御世話被成候学校之御模様も拝見仕候て、彼は御指  
教ニも仰き度候旨にて紹介願出候付此書相添出候間、御寸暇も御  
座候ハ、参堂之節御面会被下、尚御指教をも煩し度奉願候。当人  
八日藩門闕にて曾て福島県之開拓を謀候事有之候得共、教育上二  
ハ素養無之、近頃新ニ身を教育界ニ入れ候者にて、現今ハ頗る熱  
心ニ此道ニ心掛居候事ニ御座候。御多忙中乍恐縮御許容被下候  
ハ、大幸ニ奉存候。右願まで寸書如此御座候。頓首

七月十六日

花房義質

杉浦重剛様

〔註〕日置は一八九八年に旧岡山藩主池田章政から資金援助をえて私立  
養忠学校を設立、一九〇四年に私立金川中学校と改称して校長となる  
〔岡山県立金川高等学校創立百二十周年記念誌〕同記念事業実行委  
員会、二〇〇四年。

33—3 花房義質 （一）年11月13日

拝啓 愈御清祥奉敬賀候。却説小生事ハ久しく入浴仕居り候処、  
去る六日帰阪仕候間御安心被下度候。一寸御伺可仕候処、帰阪後  
ハ殊ニ多忙候而不得貴意甚失礼之段平ニ御用捨被下度候。十五六  
日頃ニハ出京仕度存し居り候得共、小生之歓迎会とか申者来ル廿  
五日ニ施行候由ニ付、夫迄ハ上京仕兼候。尤も済次第可成速ニ出

京之咎ニ御座候。就而は例之宮崎氏ニ関する出金ハ、其節持参仕候間、左様御了承被下度奉願候。先ハ右申上度如此御座候。草々

十一月十三日 義質

杉浦老兄

34 浜尾新 明治( )年6月15日

一昨日ハ参訪御外出之際御妨仕候。昨日ハ御使被下候折、時刻を約し外出掛ニて不本意之至リ、縷々御懇書之趣感佩之至、実ニ此上の善後策緊要ニて断然処分を要する儀ニ有之候。先是配慮罷在候便宜、辻氏(新次)へも御忠言置被下候ハ、幸甚候。猶又過日御内話仕候高等中学長等其他云々、同氏も何か老契へ御内談いたし度様被申居候。かた／＼可成御繰合セ、同氏へ御面会被下候ハ、便宜も被存候。尚書外ハ拜晤の上ニ讓事、勿々頓首

六月十五日夜 新

杉浦老契几下

35 土方章 明治(29)年2月28日

拜啓 久敷御不沙汰罷居候処、益御清適奉賀候。扱荆妻ノ実弟小寺謙吉氏此度修学之目的ヲ以テ上京致候ニ付テハ、貴家へ入塾為致申度本人参上候ニ付、御都合御申聞ケ被下度願上候也。

二月廿八日 土方章

杉浦大兄

【註】小寺はのち衆議院議員、神戸市長。「小寺謙吉先生小伝」(三田学園、一九六二年)によると、一九〇四年に兵庫県立神戸商業学校を卒業し、九六年に上京、杉浦の称好塾に入り語学の研鑽に努めたという。

36 松井直吉 明治( )年1月15日

拜啓 時下極寒之候、益御清適奉大賀候。陳ハ小生同郷知人理学士脇水鉄五郎君親戚之書生を貴家之御家塾へ入舎願度趣ニて、小生へ紹介を依頼被致候ニ付、同君参堂被致候ハ、御面会被下度、右御依頼迄如此御座候。勿々

一月十五日 松井直吉

杉浦老台侍史

【註】脇水は岐阜出身、東京帝大教授、森林土壤学者。帝大卒業の翌年の一九〇三年には同農科大学講師に就任。松井は一九〇年から没する一九一一年まで農科大学長を長らく務める。

37 三浦周行 明治(32)年11月20日

尊大人様御病氣之儀ハ兼ねて承り居候ひしも、一旦御帰参被遊候ひし程なれば、逐日御快帰候事と推察罷在候ひしに、新聞紙上に御訃報に接し驚入候。御高風ハ日比承り居候所、御痛悼之程も



たらすと奉遙察候。早生御留守宅へ参堂御弔問申置度候ひしかと、猶乍略儀差尺素候。日来御健康勝れさせられずと承居候へば、猶更益の御加餐之程不勝切望候。匆々

十一月二十 周行

天台先生侍史

【註】三浦は当時東京帝大文科史料編纂掛助員。二年後の一九〇一年二月には杉浦が学監を務める国学院の講師を兼任。京都帝大国史学教授となっていた一九一四年には、日本中学校卒業式で演説も行う(前掲「杉浦重剛先生」、五三三頁)。

38 本居豊頼 明治(31)年8月26日

拝啓 稍秋色を寄し来候へ共、尚燃客去兼候処、愈御清穆奉敬寿候。小生儀従日光一寸帰京候へ共、又不日参勤之筈一応参堂仕度考居候へは難計候二付、乍略儀書面を以而申上候。孫直臣之儀とかく脚氣不宜候付、此節ハ小田原へ転地為致置候付、今暫ハ御塾へ参上相成兼可申候。然処かねて御厚配を願置候今後之勉学法、いよ／＼文科大学専科可然ト之先日直臣ニ承り居候処、尚他ニ先生之御考も可有之歟之趣申居候。いつれにも先生之高案ニ御任せ申上候心算故、此上は何分可然御指揮相願度、追而帰京之上ハ参堂可相窺候へ共、右一応為念申上置候。敬具

八月廿六日 本居豊頼

杉浦先醒研北

(封筒裏) □(破れ・小) 石川区久野町二十一 杉浦重剛殿 侍史

(消印) 「東京」牛込・三一・八・二八

(封筒裏) 「牛込新小川町一八 本居豊頼」

39 | 1 本居直臣 明治32年9月8日

拝啓 其後は御無音仕り奉恐入候。時下朝夕冷氣相催し候処、去々歳先生には御病氣之為御籠被遊候趣、此程青戸氏より承り驚入候。併日々御快きかたと承り候間、先以て御幸之事と奉存上候。今日まで更に不存御見舞だに仕らざりし不注意之段、平に／＼御高免に預り度存候。暑氣は相過ぎ候へども追々寒冷之候に向ひ候折から、折角御撰養專一に奉折候。乍憚私事は次第に快く最早常体(るカ)に復し候。来は十日には殿下も当日光御還往につき、同日私共も帰京之積に御座候。先は御病氣御見舞旁如此に御座候也。謹言

明治三十二年九月八日 本居直臣 杉浦先生尊台下

39 | 2 本居直臣 明治(34)年8月5日

時下酷暑の候に御座候処、如何御暮らし被遊候欺御伺ひ申上候。私ハ去りし二十八日当地に罷越し、尔来次第に快く日々老杉の間

を運動致居候ま、乍他事御安心なし被下度候。扱過般參堂之際  
拝借致し候ひし三浦先生の玉稿、再三拝読仕候。流石に高見感服  
被致候。右疾くに御返上可申上筈を、遂に今日迄延引致し何とも  
申訳も無之次第と深く御詫申上候。今日別封を以て御返稿申上候。  
御令嬢様近々華燭の典を挙げさせらるゝ趣、此上無く御芽出度御  
事と、仄かに伝へ承はる身にすら蔭ながら喜ばしく存せられ候を、  
まして御一家の御喜びも如何ばかりかと憚り多き義ながらも御察  
し申上候。

青柳のいともながしとおぼゆるは

はなまつほどのこゝろなりけり

と推しはかり奉るもかしこしや。先は右申上度如此に御座候也。

謹言

八月五日 本居直臣

杉浦重剛先生席皮下

【註】「華燭の典」、次女菊枝が一九〇一年七月二八日、三女梅子が二  
三年一月二七日にそれぞれ上田駿一郎・西川三次に嫁ぐ（長女は早  
世）。本居の没年は〇七年。

40 のぶはち 明治(32)年12月8日

せんじつ ごしゅうしよう おさつし もうしあげ そののち ち

よつと まかりいで いろゝ、ごせつも うけたまわりたく  
ぞんじ おりましたが いそがしいに まかせ ごふれい いた  
し おり ひとえに ごめん ねかいます たゞいま おつかい  
にあつかり おそれいます いづれ まかりいで おれい  
もうしあげます あいさつ おひまの おり ごらん おきづけ  
ねがいあげます かしこ

十二月八日 のぶはち

すぎうら せんせい

41 弘 明治(35)年4月30日

謹啓 無事御着滬の由大慶此事ニ御座候。御配慮有之候原氏失火

(元藏)

後ハ善後策も致申好都合ニ御座候間、御放念被下度候。御留守宅  
も皆々様御揃御無事ニ御座候。銭町之件も平穩ニ帰し従前之通ニ  
候付、是亦御休神被下度候。御地目下梅雨之如き天候ニ有之候由、  
御困性奉察候。何分御自愛專一ニ祈上候。右御着滬御喜び旁如斯  
御座候。草々頓首

四月三十日 弘

杉浦先生閣下

【註】「着滬」は上海到着の意。

42 経則 （一）年5月21日

尊書拝読、此頃御不状之由御養生專一ニ奉禱候。小生モ去月末ニ上京候処、自身又ハ家内ニ病者有之、且彼是繁忙ニテ未タ御見舞仕兼候。多分君之事ハ御引受仕ナカラ小生予期之如ク充分ナル御世話仕兼候次第、反テ小生ニ於テ汗顔之至リニ有之候。河海不相変不穩、只々我国ニ人物ノナキハ洪歎之外無之と存候。追而拝芝万縷御座候哉奉存候

五月廿一日 経則

杉浦賢兄

43 恒 （一）年6月13日

拝啓 然は愈御清康奉賀候。扱去節安次郎氏佐賀県嘉島ニ於て突然急病之為逝去せられ候由、本日下妻たる同氏遺族より通知有之、先生へも右之趣ハ通知いたし候様申来候ニ付、右御承知被成下度申候。扱又過日一寸と訪問いたし候処、既ニ御出勤後にて不日拝謁残念ニ存候て、其後一度参上いたし度存居候処、雜誌発行前にて不日寸暇失礼仕居候。就てハ前日御申聞之原稿、来十五日頃迄ニ御出来候ハ、頂戴いたし度、御都合相伺候。宮内氏へ御返辞相煩し度奉願上候。勿々頓首

六月十三日 恒

杉浦先生案下

【註】「書画目録」には「星野恒」とあり。

44 高明 （一）年8月2日

拝啓 弥御壮剛奉賀候。先年出京候節は毎度御邪間仕候、此度上京候ニ付早速御訪問御挨拶も可申上候処、御無礼仕居候。別冊ハ幾多御座候へきと受けたる、福岡懸の郷土史に有之候。先生に於ては不尠興味にて御一覽も被成下候やと相考候間呈上候。御閑暇の節御一読願上候。何れ出發前拝芝を得て申上度事も有之、近日御訪問可致候間御差支候節ハ御面会被成下度候。右委申上度候。

拜具

八月二日 高明

杉浦先生侍史

【註】「書画目録」には「加藤高明」とあり。

（吉田信也 雲仙市図書館司書）  
（谷川穰 京都大学大学院文学研究科准教授）